

雨  
月  
風



遊びにおいでよ  
あとかぎ



遊びにおいでよ

結局、喫茶店では無難な質問しかできなかった。どこの大学に通ってるとか、どの辺りに済んでるのか、とかだ。

「何でも訊いてよ」と言われた割には、何も訊いていない気もする。しかし、あのお姉さんとわたしでは、前提が違いすぎて話の手懸かりになることが少なかったのだ。そう思って釈然としない悔しさを紛らわす。

それでも、学校の話は彼女がわたしの通う学校の卒業生ということもあり、少しは間が持った。それによると、どうやら近くにある国立大の理工学部に進学したらしい。うちの学校は進学する生徒が多いが、そんな中でも理工学部は結構珍しい。だから、噂好きなクラスメイトや進学について詳しい先生に訊ねれば、何か話が聞けるかもしれない。もっとも、それで何事か詮索されるのは嫌なので、胸に留めるだけだが。

そして、趣味はゲームとハッキング。

「ハッキング、って犯罪じゃないですか」

詳しくないが、コンピュータ犯罪をそう呼ぶらしいことを知っていた。

「んーん。元の意味ではマニアックなコンピュータいじりのことなんだな。ま、あたしがやってることなんてたかが知れてるから、格好つけなだけで」

ちよつと顔に赤みがさしたように見えた。照れているのか。

それからお姉さんは、やや渋い顔になってコンピュータ犯罪のことはクラッキングだよねー。とか、言葉の意味は変わるからなー。などと少し寂しそうにぶつぶつ呟いていた。

やっぱり変な人だ。

そう思うと、少し笑えた。

「よかった。いきなり涙目になられたときはどうしようかと思っちゃった」  
表情の変化を見られたのがなぜか恥ずかしく、顔が熱くなってしまう。

「せっかくのデートだもん。泣かれちゃ困るからなー」

「馬鹿なこと言わないでください」

「ちえー」

妙に子どもっぽいところがあるのも、発見だったかもしれない。

「にしても、空は晴れてるってのに」

喫茶店を出て、猫のように伸びながらお姉さんは言う。

「湿っぽいねー」

確かに。

「そろそろ、梅雨ですから」

一週間ほど後に、梅雨入りを伝えるニュースを聞いた。

朝夜は少し肌寒さもあるというのに、昼間は蒸すし、結構暑くなる。衣替えも進み、わたしも夏服に替えた。ベースがホワイトで、アクセントにモスグリーン。ちょうど冬服と逆の色合いになっている。

暦の上では特段イベントがなく、学校行事も少ない六月も、わたしの中学生生活は平穩に続いていた。無難に勉強をこなし、友達づきあひもきちんとする。

そして、何日かおきにお姉さんへ電話をするのも習慣になってきた。

何か目的があるわけでもない。お互い話題を探して長く沈黙することも珍しくない、とりとめない数十分程度の会話。だが、それは確実にそれまでの生活にはなかった、新しいものだった。

「あ、そーそー。日曜に駅前まで出るけど、どっか遊びに行かない？」

六月も半ばを過ぎた金曜日の夜、唐突にそう切り出された。

「いいですよ。またお昼ですか」

わたしたちの関係はいつもそうだ。わたしもお姉さんも、お互い好きなことを言い合っている。ような、気がする。

こうやって逢う約束をするのも、これまで何度かあった。



そして、ハンバーガーショップや喫茶店で話をしたり、ゲームセンターに行ったりするのだ。

とはいえ、校外での関係をあまり友達には知られたくない後ろめたさがわたしにはあるので、初めて遭遇したゲームセンターにはあまり行ってない。寮生の子が商店街にいそうだからだ。

そういうことはきちんとってはいいないが、お姉さんは結構気を遣ってくれているのだろう。

そういう考えがいつも心の底にあって、それが若干負い目になっているのだけだと。「ううん。どうかなー」

多分、わたしの考えすぎだろうと、この気の抜けた声を聞くと思ってしまう。

「悪いけど、十時頃で頼める？」

「わかりました。じゃあ、明後日に」

「んじゃーね。明日も学校あるからちゃんと言いなよ」

あたしはこれから通信だけど。そう笑い、お姉さんからの電話は切れた。

翌日の学校も特に何もなく、放課後は友達と過ごす。帰宅したら両親と食事をとり、お風呂に入って寝る。いつも通りだ。

そして、日曜日がやってきた。

普段着のブラウスにジーンズをはき、デイバックの中には文庫本。この前デートとやらに連れ出された時は読まなかったし、今日もそうかもしれないけれど、一応。

いつも学校に行くよりは遅い時間帯なので、余裕である。

電車で数分。学校の最寄り駅に着く。そういえば、この前の話で聞いたお姉さんの家は、わたしの学校からあまり遠くないところだった。彼女が待ち合わせにこの駅を使うのも納得でき、わたしに気を遣っているわけではないとわかったので気が楽だ。

そんな自意識が過ぎたことを考えつつ、今日はわたしが先に来たので、ぼんやりと壁際で人波を眺めながら人を待つ。

「やー」

十分くらいでお姉さんもやって来る。いつも通り気の抜けたふにやっとした声で、着古したTシャツにカーディガンを羽織り、年季の入ったジーンズ。そして、煙草の香り。

「待たせちゃった？ 悪いねえ」

「十分くらいですよ」

「そっかー、じゃ行こっか」

今日は先方を待たせたくないからとか何とか続けながら、お姉さんは改札を離れて駅ビルから出ると、勝手知ったるといった感じで駅前通りを進む。

彼女は重心が安定しないような動き方をしているのに、不思議と歩みに速さがある。最初は戸惑っていたが、最近は割と慣れてきた。

「ついて来れてる？」

「あ、はい」

お姉さんのほうも連れと一緒に歩くことを気にするようになったのか、最近はずっと後ろを振り向き確認してくる。

手を繋ぐのはやめてほしいと言ったらこうなったので、意外と合わせてくれる人なんだと少し驚いた。その時にニヤニヤしながら「恥ずかしいんだ」などと囁いてきたので、わたしは少し根に持っているが。

お姉さんは一見忘れてそうだけれど、約二ヶ月のつきあいから考えると、この人は割と鋭いし、いろいろ覚えていてる。だから、あまり藪はつつかないことにした。

恥ずかしいのはわたしだからだ。

そんなことを考えながらも、あの角を曲がり、この路地に入っていく。

そして今日も、以前とは違う雑居ビルの三階へやって来た。

このお姉さんが行く先はだいたいコンピュータかゲーム関係のショップだ。この辺にはそこそこ固まっているらしい。だから今日もそんなところだろう。

階段を上ったところにあつたガラス扉の向こうにはいくつかの人影がある。

いつもふたりに行く店は閑散としているところが多いのだが、今日は違ふみたいだ。

「先客来てるかー。まだあるかな」

「今日は何の店なんですか」

お姉さんはいつもわたしに何も言わず、自分だけでさっと用事を済ませてしまう。だから、今日は訊くことにしてみた。

「んー、おもちゃ屋？」

そう言いながらお姉さんが開けた扉の向こうに並んでいたのは、銃。と、箱、箱、そしてまた箱。といった感じの光景だった。かなり刺激的。いや、強烈だ。

「おもちゃ」

「そー、おもちゃ。あれはエアガン。本物じゃないから」

わたしがちよつと固まってしまったので、お姉さんがフォローする。本物だったら大問題である。

ぱっと見た感じ、所狭しと箱が積まれ、その間に人が分け入っているという感じだ。

お姉さんは時々別の通路に入ったりして人を避けつつ進む。箱は書かれていることを拾い読むに、模型らしい。そして、それを前に物色している人たち

奥にはカウンタとレジがあり、初老とっていい白髪の人男の人が座っていた。その奥にも棚と箱がひしめいている。

お姉さんが軽く会釈したので、わたしもぺこりと頭を下げる。このお姉さんは妙に礼儀正しい。個人経営のような店へよく行くからかもしれないが、そんなことはない。ファストフードでも挨拶をするので、性分かもしれない。

お姉さんはそのままふたりほど話し込んでいる先客がいたカウンタ前のワゴンへ。ここでもお互い知り合いなのか、ども、などと言い合って会釈しあっている。先にいた人たちが横へずれると、わたしにもそこが見えた。エアガンでもプラモでもなく、煙草くらの大きさをした箱と、ビニールか何かのパックが並んでいる。『お一人様二つずつまで』の注意書きつきで。

お姉さんはそこからいくつか取ると、レジへ。五千円くらい払っていた。中学生にとっては結構な額だが、大学生にとってはどうなんだろう。

お姉さんは飾り気のない白いビニール袋に入った商品を受け取ると、それを見ていたわたしに顎と目線で合図を送る。

もう出る。ということだ。

お姉さんはこれから行く店が何なのか、何を買ったか、それが何をするためのものなのかをあまり語らない。わたしが訊ねると、パソコンで遊ぶゲームだよ、みたいに曖昧な答えを返すが、わたしもあまり食いついていけないので、だいたいそこで話は途切れる。

お姉さん曰く、食いついてきたときだけ語ればいい。ということだが。

じゃあ、なんでお姉さんはわたしと一緒に買い物をするのだろうか。

ピルの階段を下りながらそんなことを考える。

わたしと逢うための口実にしては本当に必要な、真剣な顔で買い物をしている。だいいち、コンピュータショップやゲームショップなど、あまり女の子受けしない店ばかりだ。

失礼だが、友達は少なそうだ。性格にはかなり難、もとい癖がある。うえに、趣味が趣味だから学校のような閉じた環境では大変だろう。わたしのようは無難なひとりとして埋没するか、あるいは孤独なひとりになるか。

正直いって、埋没しているお姉さんは想像しがたい。わたしに接してくれるときのよう、飄々とした存在でいてほしいと願うのは、惚れた欲目なんだろうか。

あるいは、これで割と奥手で、わたしを趣味の世界に誘っているつもりなのか。そんなことを考えながら、お姉さんの髪に隠れたうなじを追って外へ出る。

「お疲れ。それじゃどっか行こっか」

ん、と伸びをしながらお姉さんがこちらを向く。

「つつても、今月は金欠だから、どこでも、とは言えないけど。座れるとこ行こ」

ビニール袋をちよつと差し上げてそう続けると、あの曖昧な笑みを見せる。大学生でも、一度に五千円は辛いのだろう。少なくともこの人にとっては。

「そういえば、わたしを連れてきたのはたくさん買うためなんですか」

お金のことをほのめかされたため、『お一人様二つずつまで』の張り紙を思い出し、質問する。意外とフェアな人なんだなと感心したのだ。

「いやー、そこまで意地汚くはないよ。君やらないでしょ、これ」

うりゃ。と言ってビニール袋をわたしの鼻先まで近づける。その隙間から、楢円に英語のロゴマークが入っているパッケージが見える。何なんだろう。

「英語、ですね」

「うん。まだ日本語で出てないからね。でも、これはくるよ」

「何なんですか、これ」